

「11月の雪を探究する(4)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

11月に東京で雪が降るといのは、普通は考えられないことである。しかし次にいつ降るかはわからない。電磁石は逃げないが、雪はあつという間に逃げてゆく。私はその日に授業があるクラスは、すべて「雪の結晶の観察」に挑戦させることにした。



場所は「ピロティ」。ここは校庭への通路で、屋根があるので、自分はぬれずに、手を伸ばせば雪粒に触れることができる。もともと半分とけた状態で降ってくる東京の雪---地上物に触れれば、数秒で融けて、あつというまに結晶の形は失われてしまう。

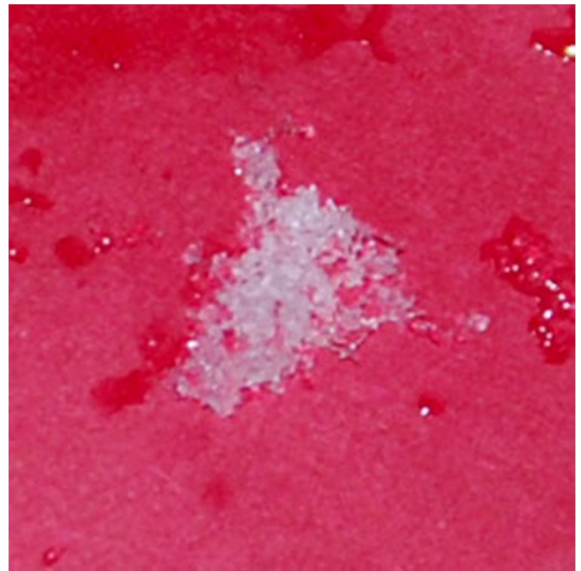
少しでも融けるまでに時間を稼ぐには、雪粒を非常に冷たいものに受けるか、または雪粒との接触面積が少ないものを選ぶことだ。つまり、ゴワゴワした素材で受けるのが良い。



色画用紙(羅紗紙)は意外と優れている。黒が一番良いのだが、見つからなかったので、赤を使用した。



手を伸ばして雪粒を受け、紙にのった直後に、虫めがねで結晶を観察するのだ。いろいろ試したが、この「直後虫めがね」よりも簡便で確実な方法はほかはない。上の写真の男児は、虫めがねの正しい使い方をよく知っている。対象物ではなく、自分の目にレンズを近づけるのが、最もよく見える方法なのだ。



ほとんどの雪粒は、こんな状態である。確かに結晶だったのだろうが、半分融けて、くっついて、かき氷の一口のようにになっている。しかしあきらめてはいけない。すべての雪の結晶が、こうして結合して落ちて来るわけではない。何十粒も観察しているうちに、必ず「雲から地上まで、一度も衝突せずに落ちてきた結晶」が混ざっている。これを「ラッキー結晶」という。さてこの日、子どもたちは出会えただろうか?